

---

# 愛と幸福のレインツリーは僕の倒錯した砂時計の夢を視ない

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛と幸福のレインツリーは僕の倒錯した砂時計の夢を視ない

### 【Nコード】

N2859B

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

幻想と失われた夢を追う彼女と、現実の森で彼女を追う僕の物語。

## 序章

森は生命の終焉であり、海は生命の始まりである。かの人は云った。それは過ぎ去り行く日々の忘却の彼方に忘れ去られたレインツリーの記憶の中に眠る一雫のような、甘美な夢のようであった。

僕が、其の言葉の意味を真に知り得るはずもなく、かといって一笑して、それは若き文学者の戯言だよ、といった非難めいた言葉を口にした訳ではない。

僕にできた事、すなわちその言葉を理解しようという努力の遂に及ばぬ所に、詠嘆があった。

「もう、僕は疲れてしまったのだよ」

僕は精一杯の感情を込めてそう言った。

それでも君は、君自身は僕の肉薄な知識と、あまりにも惨めな感受性を、憐れんだ目で見つめて

「その行為の果てにあるはずの、肉体と精神との剥離から得る甘美な夢に、徒勞の負しか見えないのですか、貴方は」

と言うのだった。

窓の外には、鬱蒼と生い茂る木々の呼吸が、ざわめき立ち、さも無知なる事は罪であり、その追求を怠った僕に償罪の意志を申し立てている様だった。

僕は、一言も言葉を発する事なくセブンスターに炎を着けると、長い間、その煙が僕の肺に沈み込むのを眺めていた。

夕立の後の湿めっぽい空気が、だんだんと床や風を冷やしていく。

「寒くなってきた。そろそろ部屋に……」

と彼女を促した。

「恐れているのですね、私を」

と言った君は、私の方を振り向かずに扉の向こう消えた。

その背中が、静かな怒りというよりも、真に理解する者など居ないという諦めを顯しているのかもしれない。

僕は、その背中に手をやりたいと感じたが、やがてその偽りの慈悲が君をどんなにか傷つけるかもしれないと思い立ち、葛藤の内に手を下ろした。

僕が彼女と、最初に出会ったのは、もう何年も前だった。彼女はその頃、英文学の講師として私の大学に来ていた。やはり、彼女の父親は有名な英文学の研究者であり、その人を僕も尊敬してもいた。彼女に会って、その事を話すと

「そういう事は父が、父の秘書の方に言ってください」とひどく憤慨した。

僕は、非礼を詫びたが、彼女に印象を悪くさせたのではないかと思っただので、こう付け加えた。

「僕は、あなたの父親の事はよく知っていますが、あなたの事はよく知らないのです。よろしかったら、今度あなたの事を教えてください」

僕は、彼女をあの方の娘としてではなく、一人の英文学者として見ようと努めた。

「驚いたわ。父の事を下手な口説き文句に利用するなんて」と彼女は心底、おかしいという顔をして見せた。

僕は弁解したが、彼女は確信を深めるばかりで、焦る僕をあしらった。

その夜、彼女は、自分が父の影に隠れていることへの不満や、毎回繰り返される滑稽な学会のやりとりに対する苛立ちを僕に打ち明けた。

僕自身も、それに対する同様の見解を述べてみせた。

彼女との距離は縮まり、そのうち、より深い関係を築くようになっていった。

何年か経ったのち、彼女がカナダに行く事になったのをきっかけに、僕らは別れた。

別段、彼女との愛情が薄れた訳ではなかったが、話し合った結果、

お互いにその方が楽であると判断したためだ。

それからの数年、僕は何人かの女の子と仲良くなり、別れた。その度に不思議と、彼女を思い出すということはなく、すっかり自然のままに彼女の不在を受け止めていた。

ある日、彼女が日本に帰ってきているという情報が耳に入った。しかし、彼女から知らせがあったのではなかったし、帰ってきているのなら連絡ぐらいあるだろうと思っていた。

後で彼女が僕に連絡しなかった訳が判明したのだが、彼女はカナダから白人のごく親しい男友達を連れてきていた。

僕がそんな事を知るはずもなく、僕は彼女に会いに行った。

彼女は僕に会おうとせずに、僕は忙しいという理由を真に受けて、その場を後にした。

ほどなくして、彼女はカナダに渡り、僕は行き場の無さを覚えたが、心の何処かでは、なんとなくではあったが、その理由も臆げに掴んでいた気がする。

そして、僕はまた、彼女がいない日々をごく自然に過ごした。以前ほど、恋愛に関して浮き沈みを繰り返す事はなかったにしても、数人との交際はあった。

だが少なくとも、その誰とも結婚しようという話はなかったように思う。

それが彼女を意識していた為であったのかどうかは、今ですら判断することは難しい。

ともかく、その様にして僕は、彼女と出会い、そして別れた。

## 次章

僕が彼女と再会した時、彼女は三十歳の半ばだったにも関わらず、髪は全て絹のような白髪に変わり果てていた。にも関わらず、彼女の表情は、僕が彼女と出会った当時よりも幼く感じられた。

それは、僕が歳をとった為だけではないだろう。彼女は精神的にも大きく疲労し、研究に熱中するあまりこの様な姿になっていた。

彼女は、『白い森』研究に一生を捧げる事を決心していた。

彼女は、カナダに滞在しイングリッドにも数年住んだ。それは、彼女の文献研究における最も重要なプロセスだった。

彼女の主とする研究対象である『白い森と妖精に関する諸物』『レインツリーの考察』『夜の森と幻想世界』を著した有名なテニエル・D・カーヤップが最後に訪れたのは他でもない日本の森だった。そこで彼女は日本に舞い戻り、僕の元を再び訪れる事になったのだ。

彼女からの電話を貰った時、僕は複雑な気持ちだった。もう二度と会う事はないと思っていたし、会いたいと彼女が言うなどと想像できなかったからだ。

研究者としてではなく、個人として僕に会いたいと言ったのだ。ホテルのロビーで、最初に僕は彼女を見た。一目で彼女だと理解した僕は

「会いたかった」

とだけ言った。他にかけられる言葉など無かった。

「私もよ、でもすっかりおじさんになったわね」

冗談かと思ったが、彼女は泣いていた。それから僕らは抱き合って、再会を喜びあった。

長い間、凍りついていた氷塊が溶けだして、いろいろな感情が溢れだしていた。

だが、それでも、その時ですら僕は彼女を見ていなかったのだ。

僕が見ていたのは出会った時のままの聡明で美しい彼女だ。

その時の彼女の姿も、ある意味で美しさを兼備えてはいたが、輪郭の薄さや、あまりにも細い腕は、危なげで、触れたとたんに硝子や、あるいは薄氷のように壊れてしまいそうな印象を受けた。

以前から、彼女と話す話題の多くは研究に関する事だった。しかし、近況報告の中で、彼女が二度の結婚と破局を経験している事、白い森研究を日本の森で行いたい、という事の他にはあまり語ろうとしなかった。

なぜ、そんな姿になってまで研究を続けるのか。また、その研究の先に何があるのかといった具体的な事は、何一つ知ることはできなかった。

僕は、出来るだけ協力したいと申し出た。彼女の苦勞や負担を減らす事ができるなら、僕は本当に何もかも投げ売ってでも力になりたかった。彼女の本心は分からなかったが、僕の積極的な姿勢に困惑しつつも、幾らかの安堵が読み取れた。

そして僕は、大学での地位を捨て、彼女と森に隠棲するような形で、阿蘇の山奥に向かった。

雄大で尊厳に満ちた、樹木や鳥達の息遣い、人間の手が加えられていない、そのままの自然の風景は私達の心を打った。

生命の営みの生死を繰り返す様や、一時も静止することのない、自然の大木そのままの姿がある事にも感動した。

しかし、彼女の研究の全容というものが掴めぬまま、また、臆気ながら見え隠れする彼女の精神の崩壊の一端を、僕は見ることになるのだった。

## 終章

彼女の白い背中が、森の奥に消えていく。彼女の精神は、僕が考えていたよりもさらに複雑になっていた。

時々、無邪気な子供ののように笑いだし、その時は体が本当に軽くなったように跳ね回る。それはまるで、森の妖精のようにも見えた。僕の事を、父親かあるいは祖父だと思い込む事もある。

体は、成熟した中年の女性なのだから、力は強いので、抑え込むのは一苦労だ。

しかし一方で、彼女は正氣に戻ると、老衰した老婆のように疲れきっていて、取憑かれたように、森に入っては研究に没頭する。

それは、恐ろしい魔女のようだった。この両極端な彼女の精神は、彼女の肉体を壊していくように見える。

僕は、何もできないまま彼女の白い背中を見る。痩せた体は痛々しく、心が締め付けられるような感覚に陥る。

僕には、彼女の研究を手伝う事はできなかったので、彼女の身の回りの世話をすることしか彼女の役にはたてなかった。

彼女の研究がいつ、どんな形で終わるのかは分からない。

それが分かるのは彼女だけかもしれないし、彼女にすら分からないのかもしれない。

ある日、彼女がいつものように森の中に消えた。僕も、彼女が迷わないように着いていく。

彼女が正氣の時は良いのだが、森の中で狂気に襲われたりすると、彼女は自分が今、どこにいるのか分からなくなるからだ。

これまでも何度か、彼女が帰ってこない夜があった。

幸い、時間が経って、正氣に戻り、切り傷だらけになって帰ってきたが、それ以来、私も森に入って彼女の側に居ることにした。

彼女が、何か珍しい蝶を見つけ、あれがカーヤップの書いた妖精の原型かもしれないと調べ始めた。



虫籠に、蝶を捕えて、一つ一つの特徴を書き出し、比較する根気のいる作業だ。

僕も、助言をしようとしたが、やはり専門的な知識がないと駄目なのか、彼女の書き出した文章さえ、ろくに解らなかった。

二時間ぐらいして、彼女が突然立ち上がり、フラフラと歩き出した。

僕は、悪い兆候かもしれないと判断し、彼女を揺さぶって目を覚ませようとしたが、彼女は、かえって剣幕に脅えて泣き出してしまった。

子供のように泣きじゃくる彼女を引つ張って森の出口に向かおうとすると、彼女は、僕の手を引き離して、森の奥に走り出した。

僕は、とっさのことに驚いて、彼女を追い掛けたが、

彼女は一度も振り返ることなく奥に進んだ。

体力が衰えていた事もあり、何度も彼女を見失いそうになった。

急に開けた場所に出たかと思うと、そこは断崖だった。彼女は遥か下の方で蹲り、身動きが取れないのか、すでに絶命したのか、全く動かなくなった。

そこには、あの時捕まえた蝶が何億匹いるのか分からないほどの群れになって、羽を動かしながら木に止まっていた。

僕は絶望の中で立ちすくんだが、その光景は妖しげで美しくもあった。

彼女の求めていた妖精の伝承は、この木と関係があつたのかもしれないが、迂回して崖を降りた僕は、彼女が冷たくなって横たわっているのを見ると、どうしようもなく沈んだ気分になるだけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2859b/>

---

愛と幸福のレインツリーは僕の倒錯した砂時計の夢を視ない

2010年10月8日15時51分発行